

第1部◎「共生」への問いかけ

歴史にみる「共生」

上野隆生 UENO Takao

1. はじめに

「共生」は、現在では極めて多用されている言葉の一つであろう。大学でも「共生」を冠した学科があり、高校では「共生」を校名に入れたところもある。「共生」を名称に含む学会も生まれている。また、教育研究機関だけでなく、地方自治体では既存の部課を「男女共生課」という名称に変えたところがあり、警察では「来日外国人共生対策指針」とか「共生対策モデル署」を設けたところもある。また、2007年の都知事選では、「共生」を党名に掲げた政党も登場した。一般的な用語法に至っては、「〇〇との共生」という表現は枚挙に暇がない。このように、「共生」という言葉の使用は今や日常茶飯事化していると言っても過言ではない。

だが、一見流行っている言葉に対しては、無条件に取り込まれることのないよう、一定の慎重さを以て臨む必要があるのではないだろうか。換言すれば、厳密などとはいわないまでもその言葉の意味する内容を確認しながら使用することが最低限重要であろう。安易な「共生」の使用には思いがけない落とし穴がある。その点を過去の使用例を振り返りながら考えてみるのがこの報告の趣旨である。

2. 「共生」の含意：戦前

実は、日本の近代を振り返れば、言葉の持

つ政治的含意と実態の乖離が甚だしかった事例は意外に多い。たとえば、「独立」・「協和」・「共栄」といった言葉がそうである。結論的にいえば、人々はその言葉に紛らわされ、踊らされたともいえよう。

19世紀から20世紀にかけての世紀転換期、日本は朝鮮の「独立」を主張して日清戦争・日露戦争に突入していったが、その「独立」の実態は、清やロシアからの「独立」で日本による朝鮮植民地化がその帰結であった。1930年代、「五族協和」を掲げて中国東北部を武力占領した日本は「満州国」を作ったが、「満州国」は最初から日本による「内面指導」が予定された傀儡国家であった。また、アジア・太平洋戦争時の「大東亜共栄圏」の実態は、「共栄」の名の下に展開された、虐殺や食料・資源の収奪であった。このように極めて簡単に歴史を振り返っただけでも、言葉の実態を検証する意味は大きいことがわかる。

それでは「共生」という言葉はどのようにもちいられてきたのだろうか。アジア・太平洋戦争中には、親日傀儡政権下のアジア各国の指導者が、「共生同死」「同生共死」を強調したことが当時の新聞で報じられている。この指導者らは、1943年に東条内閣が開催した大東亜会議の出席者でもある。この文脈での「共生」はまさに日本と「同死」を強制するものであった。その終局点が、沖縄戦での

「軍官民共生共死」である。

3. 「共生」の含意：戦後

戦後、「共生」という言葉は日米安保体制をめぐるやり取りの中でも登場する。1967年、沖縄返還と安保体制への一層のコミットメントが関連付けて語られた下田駐米大使の発言に対して、それでは「アメリカとの共生共死体制を確立すること」になるとの批判がなされた。

1970年代以降になって、「人間と自然との共生」という言い回しも登場するようになる。しかし、その頻度は極めて限られたものであった。

「共生」が多用され始めたのは1990年代に入ってからである。就中、1992年に主要経済団体が開催した複数のセミナーでは、相次いで「共生」が掲げられた。その理由は、日本企業が変わったと外国から認知されるためには、1980年代後半の日米貿易摩擦時に強調された“good corporate citizen”だけではなく、たとえば「共生」が必要である、というものであった。以後、あらゆる場面で「共生」は登場するようになった。原子力発電所との「共生」、成田空港との「共生」、米軍や自衛隊基地との「共生」、といった具合である。この意味での使用例の典型的なものが、1994年、当時の防衛施設庁長官の「沖縄は基地と

共生、共存する方向に変化してほしい」という発言である。これらの使用例は、異質なものと強制的に併存させられる——「共生」することを強制される——類の事例であり、かつての「共生同死」「同生共死」と同根であるといえよう。翌1995年、戦後50年を迎えるにあたって、保守的政治家や評論家らは国会の不戦平和決議に反対する集会を開いた。その名称は「アジア共生の祭典」で、「共栄」が「共生」に変わってはいるが、「大東亜会議」の二番煎じとでもいふべきものであった。

4. 「共生」とその陥穽

現在流行っている「共生」には、ある種の情緒的感覚が含まれているように思われる。何と無くではあれ、少なくとも善いことという感覚があろう。だが、無定義的にそのような情緒的感覚を持った言葉が使われる時、すでに垣間見てきたように、その言葉が政治的な利用に供される可能性は大きい。最も警戒すべきなのは、「同化」を強制しようとする「共生」の使用であろう。「共生」しなければならない、と語られる時、そのような「同化」強制圧力は顕在化する。その極限がかつては「共死」であった。これほど逆説的な使用法はあるまい。そのような陥穽に陥ることだけは避けなければならないだろう。